

# 児玉 桃 ピアノリサイタル

## 1部

- トッカータ ニ長調 BW.912 .....J.S.バッハ  
半音階的幻想曲とフーガ BW.903...J.S.バッハ  
イタリア風協奏曲 へ長調 BW.971...J.S.バッハ
- 2部  
俳句 .....細川俊夫  
4つのマズルカ Op.24 .....ショパン  
スケルツォ 第2番 .....ショパン  
「幼児イエスに注ぐ20の眼差し」より  
15番 イエスの口づけ  
10番 喜びの聖霊の眼差し .....メシアン

夏

## 四季コンサート 2007

2007年6月1日(金)6:45 PM

会場:浜松市教育文化会館

主催:浜松音楽友の会

### プロフィール

バッハからメシアンを含む現代作品まで、幅広いレパートリーと豊かな表現力で国際的な活躍を続ける、国際派ピアニスト。1991年、ミュンヘン国際コンクールにて1位なしの2位に輝く。その後、ケント・ナガノ指揮ベルリン・フィル、小澤征爾指揮ボストン響、モントリオール響、ベルリン・ドイツ響、ハレ管など、世界のトップオーケストラと共に演じ、デュトワ指揮NHK交響楽団とのアジアツアーや、ウィーン八重奏団との日本ツアーなど、着実にキャリアを築く。また、ロンドンのウェーヴィングモアホールをはじめとするヨーロッパ各地や、モーストリート・モーツアルト、マールボロ、ルツェルン音楽祭、ラ・ロック・ダンテロン、ナントなど、多くの国際音楽祭からも招かれ、リサイタル、室内楽と活躍している。最近は、2004年5月に名古屋フィルとのヨーロッパ・ツアーでソリストをつとめ、続いてゲルギエフ指揮東京都響と共に演。イタリアでペルト作曲の新作協奏曲をイタリア国営放送(RAI)交響楽団と共に演。11月にはノリントン指揮シュツヴァットガルト放送交響楽団とのドイツ及び日本ツアーで大成功を収めた。2005年夏にはラ・ロック・ダンテロン、シュレスヴィヒ・ホルシュタイン音楽祭へ参加し、高い評価を得た。2006年4月には北ドイツ放送交響楽団の定期演奏会に出演し、細川俊夫の新作(世界初演)とモーツアルトの協奏曲を一夜に演奏する企画と演奏が高く評価された。同年12月には、小澤征爾指揮水戸室内管弦楽団定期演奏会でも同企画での演奏を果たし、絶賛された。CDはオクタビア・レコードから2003年2月に、デビュー盤「ドビュッシー:impressions」、次いで「ショパン・ピアノ作品集」(エクストン)をリリース。2005年12月には「メシアン:幼児イエスに注ぐ20の眼差し」がリリースされ、注目を集めている。パリ在住。

児玉 桃  
ピアノリサイタル



MOMO KODAMA  
PIANO RECITAL

# 曲目解説

真嶋 雄大

## ● J.S.バッハ (1685~1750) / トッカータ ニ長調 BWV.912

この作品は、チェンバロのために作られた「7つのトッカータ BWV.910~916」の3曲目で、バッハがヴァイマル宮廷のオルガニストをしていた1710年頃作曲されたと考えられている。トッカータとは、16世紀に発祥した即興的で自由な性格を持つ鍵盤楽曲である。17世紀にはイタリアやドイツのオルガン音楽の作曲家たちによって形式的にも確立されたが、バッハはそのブクステフーデなどの影響を受け、自己の様式に基づく比較的大規模なトッカータを発展させていった。この「ニ長調」もフーガを含み、猛烈なクライマックスが印象的である。

## ● J.S.バッハ / 半音階的幻想曲とフーガ BWV.903

芳醇なファンタジーと叙情性、またドラマティックな効果で、数あるバッハのクラヴィア作品の中でも特に親しまれている。ヴァイマルからケーテンの宮廷に移った1720年頃に着手され、最終的には10年後のライプツィヒ時代に完成されたと推定されている。特徴的で力強い音階風の楽想から開始され、ヴィルトゥオーゾ的に即興性を帯びたモチーフや分散和音、レシタティーヴォなどが次々に現れる。それは常に幻想的な雰囲気に彩られているが、続いてバッハの名前を並び替えた音型 (ABHC) の主題が三声のフーガを構成して展開、大きく盛り上がって全曲を閉じる。

## ● J.S.バッハ / イタリア風協奏曲 ハ長調 BWV.971

バッハの代表作のひとつである。バッハは青年時代からイタリア音楽を研究しており、既にヴァイマル時代にはエルンスト公子がオランダ留学から持ち帰ったヴィヴァルディの協奏曲を一台のクラヴィアに編曲することを試みていた。そしてライプツィヒ時代、協奏曲様式を習得したバッハの高度な作曲技法が結実し、この「イタリア協奏曲」が創り上げられたのである。1735年、「クラヴィア練習曲集」第二部に《フランス風序曲》とともに収められて出版されたが、イタリアとドイツの音楽様式の対比を意図したものと思われる。

第1楽章(速度指定なし)ハ長調、第2楽章 アンダンテ ニ短調、第3楽章 プレスト ハ長調。

## ● 細川俊夫 (1955~) / 俳句《ピエール・ブーレーズのための俳句—75歳の誕生日に—》

細川俊夫は日本の現代作曲家、指揮者。この作品は、2000年3月26日に行われたピエール・ブーレーズ75歳の誕生日を記念したコンサートのために作曲された。当日初演したのはロルフ・ハイント、その後2003年に改訂され、その版は同年4月11日、ルツェルンにおいてピエール・ロラン・エマールによって演奏されている。細川は、「この作品はピアノによる音のカリグラフィー（筆者注：ギリシャ語で美しい書き物という意味で、いわゆるアルファベットの書道）である。垂直的に打ち込まれる音。その余韻と空白。その空白のインテンシティーは、音そのものの力によって生み出されていく」と語っている。

## ● ショパン (1810~1849) / 4つのマズルカ Op.24

マズルカは、ポロネーズと同様3拍子の舞曲である。ショパンが書いた最初の作品がポロネーズであり、そして絶筆となったのがマズルカであることは象徴的。ショパンは日々の心象風景を綴るように生涯にわたって連続とマズルカを書いた。単なるボーラントの民族舞曲であったマズルカに、洗練された旋律や大胆な和声や転調など、極めて独創的なアイディアを注入し、芸術作品として昇華させた功績は大きい。それは58曲にも及んだが、この作品24は1835年頃に作曲されている。

第1番 ト短調、第2番 ハ長調、第3番 変イ長調、第4番 変ロ短調。

## ● ショパン / スケルツォ 第2番

もともとスケルツォとはイタリア語で「冗談」を意味するが、ショパンのそれは趣を全く異にしている。確かに躍動的で4分の3拍子ということでは様式を踏襲しているものの、大胆かつ先取的精神に溢れた構成、複雑なリズムの構築、意外性に満ちた旋律線など本来の性格とは掛け離れた展開を見せている。即ちショパンは自身の精神や心情を直接吐露するため、「スケルツォ」という特別なタイトルを使ったのである。

4曲あるスケルツォのうち、この第2番はマリア・ヴォジンスカとの婚約が解消された1837年に作曲された。独創的な構成と旋律が強い緊張を生んで全編を支配しているが、第2主題は極めて叙情的で優美である。

## ● メシアン (1908~1992) / 「幼児イエスに注ぐ20の眼差し」より。

### 第15番 <イエスの口づけ>、第10番 <喜びの聖靈の眼差し>

メシアンは20世紀を代表するフランスの作曲家で、この作品は代表作のひとつ。全20曲で構成されているピアノ曲集で、メシアンのカトリック的題材による作曲時期の頂点に位置する。各曲は固有の主題の他に、4つの循環主題（神、神祕の愛、星と十字架、和音）が設定され、テンポや強弱、また色彩のコントラストに従うなど象徴的な根拠と関連性から配列されている。この第15番と第10番は、第1番、第5番、第20番とともに“神性の眼差し”に係わるものであり、特異な作曲技法を携えた、目も眩むような色彩感が織り込まれている。